

合理的配慮の提供と交流学級の児童による関わりを促した事例

知的障害特別支援学級に在籍する小学2年生の児童への学習内容の変更・調整をすすめながら、交流学級の児童との関わりを促した交流及び共同学習

○概要

A児はB小学校の知的障害特別支援学級に在籍する2年生である。A児は、国語、算数、自立活動を特別支援学級で学習し、その他の教科、総合的な学習の時間、学級会活動を交流学級で学んでいる。A児は身辺自立や発語の遅れがあり、コミュニケーションもとりにくいため、介助員が付き添って交流及び共同学習を行っている。交流及び共同学習では、交流学級担任による合理的配慮とともに、交流学級児童による支援が必要であるため、まず、交流学級の担任から児童に対してA児の様子を説明し、A児が仲間として楽しく学習や生活に参加できるようにした。そして、交流学級の児童が、A児と関わりを持つような場面を設定した。さらに、体育や音楽などの教科では、A児の実態に応じた合理的配慮を行った。交流学級の担任は学級通信で、保護者にA児との関わりの様子を知らせ、交流及び共同学習に関する保護者の理解・啓発に努めた。

1. 対象児童について

A児 : A児は、小学校の知的障害特別支援学級に在籍する2年生で、重度知的障害の診断を受けており、また外部専門家から自閉症スペクトラムの傾向があると指摘されている。言語の遅れがあり、理解言語は3歳程度である。指示語は理解できるため、大人の指示で行動に移せる。また、表出言語は単語でオウム返しでの発語がみられる。交流学級の児童が話しているも言葉を用いて、A児もその言葉を発語できるように促している。また、語彙を増やす練習をしている。特別支援学級では、形の区別はできるので、絵と文字のマッチング、数字と丸の数のカードとのマッチングの学習をしたり、平仮名・数字を書いたりしている。

2. 活動のねらい

A児は、国語、算数、自立活動以外は、交流学級で学んでいる。体育は、A児が未体験の種目が多いので、A児ができることを選んで参加できるようにしている。グループでの作業活動、係活動、当番活動等は介助員や他児の支援を受けて、おおむね他の児童と同じように活動するようにしている。

3. 事前の取組と配慮

交流学級での学習に関して、特別支援学級担任と交流学級担任が密に連絡を取り、場合によっては、交流学級で行う学習を、事前に特別支援学級で学習するようにしている。

交流学級に在籍する児童に対しては、年度初めに、障害理解の授業を行うとともに、A児の得意不得意やA児への関わり方についての授業を行った。また、A児のコミュニケーション手段であるマカトン法について、「おわり」「だめ」「ちょうだい」「トイレ」「おねがい」の5つを交流学級の児童も学習した。

交流学級での座席は介助員が補助しやすい後部の位置に配置した。隣席は1年生のときにA児と同じ組で親しくしている児童にした。その後、1か月毎の席替えでは、担任がA児を中心に関わりが慣れている児童、そうでない児童が混ざるようにした。

交流学級の保護者には、学級通信で、A児の学習や行事への参加の様子等について伝えている。

4. 活動の様子と成果

体育では、A児の実態に応じて内容を調整して行っている。サーキットトレーニングでは、A児はタイヤ飛びを一度では飛び越せないのので、タイヤの上に乗って、ジャンプして降りるように変更した。縄跳びでは縄を回すことが難しいので、フープを活用してフープなわとびに変更した。その結果、一人でフープを回して飛んでまたぐことができた。



フープなわとび

音楽では、A児が鍵盤ハーモニカに息を吹き込むことが難しいので、代わりにキーボードを用意した。交流学級の担任が指で一音ずつ押さえて見本を見せると、A児はそれを真似て一音ずつ押さえることができた。その後、キーボードの代わりに「ぴかぴか光るピアノ」を用意すると、光るところを押さえて、指を動かすことができた。



体育の授業や身体検査で並んで待つとき等、A児に自分がいる場所がわかるように、フープを置き位置を示した。移動するときは、そばの児童がフープを動かしてA児に示すことで、A児は自分の位置を理解し動き出した。

使用したキーボード

交流及び共同学習を重ねるにつれて、休み時間に児童が、A児に積極的に話し掛けたり、移動のときに手を繋いで案内したりする様子が見られるようになった。このような取組の積み重ねにより、A児が交流学級での活動に円滑に参加でき、交流学級の児童にもA児を気遣う心が育っていった。また、運動会を切っ掛けとして、他の学年にも支援の輪が広がった。

5. 事後の取組、今後の課題

今後の課題として、A児の学年が上がるにつれ、同級生との関係性が変化することが予想される。中学年、高学年における、A児と同級生にとって更なる学びにつながる交流及び共同学習の在り方を模索する必要がある。また、特別支援学級担任、交流学級担任、特別支援教育支援員、介助員などといった関係者との密接な連携を図る必要がある。